

突発性難聴について

監修: 笠井耳鼻咽喉科クリニック・自由が丘診療室 院長 笠井創 先生

突発性難聴とは

突発性難聴とは、ある日突然片方の耳が聞こえなくなる障害です。典型的な症状として、

- ・片方の耳が聞こえない、または聞こえにくい
- ・耳が詰まった感じがする
- ・耳鳴りがする
- ・めまいがする

以上があげられます。めまいは、2～3日で消えてしまいますが、耳鳴りや難聴は続きます。めまいは、比較的治りにくい場合に多く出る症状です。また他にも、自分の話す声に変に聞こえたり、音が響くような感じがしたりすることもあります。

突然難聴が始まるため、難聴が起こったときのことを覚えている人がほとんどです。しかし、片方の耳に症状が出ていても、もう片方の耳は聞こえるため、難聴に気づきにくいこともあります。電話で話すときやヘッドフォンで音楽を聴くとき、片側から話しかけられたときに聞き取りにくいなどで難聴に気づくことがあるようです。また、睡眠中に突発性難聴が起こり、朝目を覚ましたときに突然聞こえなくなっていることもあります。健康診断などで行う通常の聴力検査では突発性難聴が発見できないことがあるため、注意が必要です。

突発性難聴の原因

内耳にはリンパ液に満たされた蝸牛という部位があります。音は、外耳、中耳を通

って内耳へと伝わり、内耳の蝸牛の中の有毛細胞を振動させ、蝸牛神経に伝わります。この蝸牛神経が脳に音を伝え、脳が「聞こえる」と判断します。聞こえが悪いということは、このしくみのどこかに障害が起きているためなのです。

難聴には、外耳・中耳・鼓膜に原因がある伝音難聴と内耳に原因がある感音難聴があります。めまいや耳鳴りを伴う突発性難聴は、内耳に障害が起きていると考えられます。

突発性難聴の原因は、風邪などのウイルスが耳の神経細胞を破壊するウイルス感染説、内耳の血流がなんらかの原因で悪くなり機能が低下する血液循環障害説、アレルギーなどが考えられますが、はっきりとはわかっていません。働き盛りの40～50代に発病することが多いのですが、20歳以下の若年層や高齢層にも起こるため、かかりやすい年代や男女差などありません。

ただ、精神的なストレスを抱えていたり、体が疲れていたりする場合に発症することが多いため、ストレスや疲れをためないことが予防となります。また、風邪が発症のきっかけとなることも多いため、風邪の引き始めには無理をせず、安静にするよう注意が必要です。

難病情報センターの調査では、1993年に突発性難聴の全国受療者数は、推定で年間24,000人、人口100万人あたりで192.4人でした。しかし、2001年は全国受療者数は推定、年間35,000人で、人口100万人あたり275.0人と増加しています。これは、現代がストレス社会となっているためだと

も考えられています。

突発性難聴は遺伝しないと考えられています。遺伝性の難聴は両側に起こることが多いのですが、片側の耳だけが進行することがあります。この場合でも、聴力検査をすると両方の耳に難聴が起きていることがわかります。

突発性難聴の診断

突発性難聴の診断基準は、1973年に定められた

- 1) 突然の難聴
 - 2) 高度な感音難聴
 - 3) 原因が不明
- の3つです。

耳鼻科ではまず問診をしますが、はっきりした突然の難聴があれば診断は容易です。外耳や中耳が塞がっていない、鼓膜に異常が見られないかなどの検査をします。聴力検査では、低音から高音まで幅広い周波数の音を出し、ヘッドフォンから聴こえるかどうかをチェックします。通常の生活で聴こえる音域よりも広い範囲の音が聴こえるかどうか検査し、どの音域に難聴が起きているか調べます。

副症状として耳鳴りやめまいの有無もチェックすることが大切です。

突発性難聴は、血液検査など様々な検査をしてみてもどこにも異常は見当たりません。聴力のみが障害を起こしている状態なのです。

突発性難聴の治療

突発性難聴の治療は、ステロイド剤とビタミン剤の投薬です。血液の循環をよくして炎症を抑え、弱っている神経機能を改善します。症状が軽い場合は通院し、1～2週間で治ります。重度な場合は入院して安静を保ち、投薬治療と点滴をします。重度の難聴でも治療は2週間程度となります。

こうした投薬治療と同時に、ストレスがかからない、疲労をためこまない生活をするように心がけます。激しい運動も控えたほうがよいでしょう。

突発性難聴は、必ず完全に治るということではなく、統計的には全体の3分の1の人は完治し、もう3分の1の人はなんらかの後遺症を残して症状が改善し、残りの3分の1の人は改善しないともいわれています。

突発性難聴のうちの何割か、また軽症の場合は自然に治るといわれています。

しかし、注意しなければならないのは、早期治療をすることです。発症から1～2週間以内に耳鼻科を受診し治療をするようにしましょう。発症後2週間以上たつと治りが悪く、1ヶ月以上たってしまうと、治療しても改善の見込みがなくなってしまう。聴こえに違和感があるときは、そのまま放置せずに必ず耳鼻科を受診することが大切なのです。

一般的には突発性難聴は再発しないといわれています。一度治療をした後に難聴を繰り返す場合は、メニエール病など他の病気が考えられます。突発性難聴と診断されても、メニエール病や聴神経腫瘍など別の病気が隠れている場合もあるため、回復後も定期的な聴力検査を受けるようにしましょう。

突発性難聴は原因がよくわかっておらず、ストレスや疲労が発症のきっかけになると考えられています。このため、突発性難聴は誰にでも起こりうる病気といえます。予防方法ですが、完全に予防することは難しいため、耳に違和感を感じたり聴こえが悪いと感じたら、すぐに耳鼻科を受診することを心がけておきましょう。